

カサゴ栽培生態研究

(予算区分 県単 平成15～19年度)

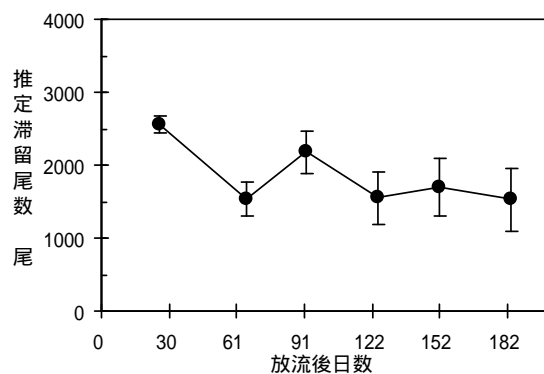
担当：伊豆分場

【研究の背景とねらい】

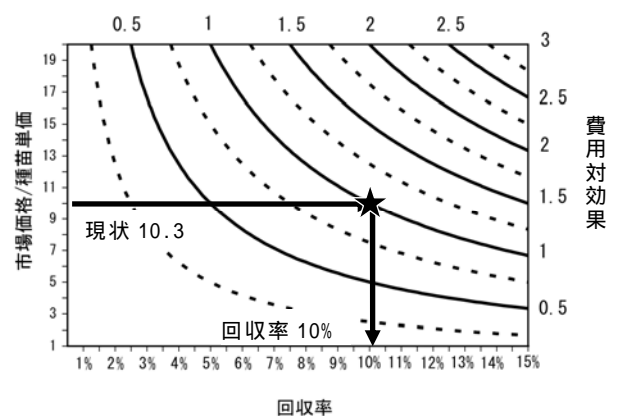
種苗放流によるカサゴ資源増殖を行うための基礎的な情報として、カサゴ類の漁獲特性、利用実態を把握し、効果的な種苗放流技術を開発します。

【研究成果】

- ・放流直後の放流魚は、天然魚の行動とは異なり海底に密集して静止しており、ウツボにより捕食されることが観察されました。食害により生残率が低下していることが示唆されました。
- ・飼育期間の異なる稚魚(0歳および1歳)による食害試験の結果、長期飼育の方が食害を受けやすい傾向が認められました。
- ・放流適地の条件を明らかにするため、底質が転石、玉石、岩盤、砂地に0歳魚を放流して滞留状況を比較した結果、長径50cm以下の転石域での滞留が良好でした。
- ・夏期に放流した場合、滞留は冬期よりも良好でした。
- ・台風によるしけの後に滞留数が減少したことから、放流場所は海況の影響を受けにくい静穏域が良いと考えられました。
- ・放流適地の条件を満たす下田市鍋田地先において0歳魚1万尾を放流した結果、半年後に1～2割の滞留が認められました。
- ・費用対効果を、回収率×(1尾あたり平均価格/種苗単価)=回収率×価格比 とすると、現在の価格比は515円/50円=10.3であり、費用対効果が1になる回収率は1/10.3=0.097で約10%と計算されました。



カサゴの滞留尾数の変化



回収率と価格比による費用対効果

【研究成果の普及方法】

- ・ここで得られた方法により放流魚の生残率を高めることができます。
- ・1以上の費用対効果を得るためには放流技術以外での対応が必要です。
- ・各地で種苗放流を実施するためには、放流適地の条件を満たす場所を広く探索する必要があります。

(作成 平成19年3月)